

## 熊本大学学術リポジトリ

## Kumamoto University Repository System

Title	東人形 : 文苑
Author(s)	島, 剛
Citation	龍南會雜誌, 156: 65-98
Issue date	1914-12-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6411">http://hdl.handle.net/2298/6411</a>
Right	

あんなものが此の空間に存在して居る。それが自分と同じ血液の流れを持つてゐると言ふ。不思議だ。不可解だ。偽かも知れない。夢かも知れない。自分は生れると直ぐから此の夢を見て居るのかも知れない。生れぬ前から見續けてゐるのかも知れない。覺めさうなものだ。醒めろ醒めろ、前は久しい間自分を昏睡に誘惑してゐた。

眼界の闇黒中に、闇黒な渦巻きが、音もなく、ごろ／＼と湧きかへつた。親や子や兄弟や、哲學や宗教や科學や、何と言ふ恐ろしい謎であらう。

## 東 人 形

島

剛

### 一 M の 手 紙

僕は君が今日云つた事がまるで判らない。想像も出来ない。君はいつも淋しいと云ひ悲しいと云つた。然し僕には判らない。それは君の淋しさなり悲しみなりが如何なる源から發するかと云ふ事に付いては君は全く口をつぐんで終ふからである。僕は嘗て淋しさや悲しさを味つた事がない。父母健在で自由に勉強の時間と費用とを與へられて居る僕等には如何なる心配も苦痛もない筈だと固く信じて居る。僕が強いて君の悲哀の源を想像するとすればそれは君の御母堂の他界である。而かもそれは十年も前に起つた事は君の話で知つて居る。然し君の淋しさ悲しさは近頃になつて起つた不思議な現象に過ぎない。だから僕には全く判らないのだ。君はよく僕に理屈を云ふ男だと云ふ。然し君は理論の尊ぶ可きを忘れて最も薄弱なる感情の奴となつ

て居るではないか。君は感情の命するまゝに行動するのを最も自然な最も勝れた行爲だと思つて居る。此事に付いて僕が一寸でも反對意見を陳述すると君は火の様になつて辯解する。而かも辯解とか言ひ譯とかは君の最も嫌ひな手段ではないか。君は他人の誹謗に關はらず自分の信するまゝ——即自然の命するまゝ——を黙つて實行するのをモットーとして居る。而して言ひ譯は最も卑劣な者の手段と信じて居る。それは僕も頗る同感である。然し僕は人と生れた以上全く辯解を避けて君子人となる事は困難である、否寧ろ出来得ざる事と云つた。然し君はそれが必ず實行さるゝものと信じて居る。そこに君の矛盾の根本が存在して居るのだと思ふ。

君は僕に『東洋道德』と云ふ偽名を付けて呉れた。僕は充分その意味が解らない。恐らく君にも判らないと思ふ。然し君の意味する『東洋道德』とは『貴様は解らず屋だ。頑固な奴だ』と云ふ事であらうと思つて居る。それはいつも僕がむづかしい理屈をならべて君を沈黙させる時、君が恨めし相に僕を流し目に見た後にいつもこの『東洋道德』を大喝するからである。その代り僕は君に『亡國民』と云ふ偽名を送り返した。この意味も同様に充分満足な了解を持たないだらうと思ふ。然しそれは『薄弱な思想家、感情の奴め』と云ふ意味らしい。僕も判らないのだ。それは時として君の感情論が優勢になつて、僕を沈黙させる時、僕が発言し得る誰一の言葉は、この『亡國民』であるからである。

君は僕に『東洋道德』と云ふ偽名を贈つて呉れた程、道德の存在を無視する者である。君は倫理とか道德とかは人間の拵へた物だと云ふ事をよく口にする。それにはいつも嘲笑が伴つて居る。君は時折社會と道德とを切り離して考へたがる癖を持つて居る。更に進んでは人と道德とを別物にして丁ふ事さへある。君は即

道德の必要を認めないのであるまいか。善意に之を解釋すれば、君は道德を枝葉の問題として感情を根本の基礎として居るのでは、あるまいか。感情の命するまゝに行動する事は最も尊いものであつて之には道の力も法の力も全くその權威を失ふものであると云ふ事を固く信じて居るらしい。

然しそこには大なる矛盾がある。欠陥がある。けれ共、今はそれを云はない。云ふ可き時期でないと思ふからである。今日は、君の淋しさ悲しさの研究に當てた日であるからである。敢て君の『東洋道德』と云ふ大喝に恐れをなした譯ではない。

然し一概に君の欠點ばかりを上げるのが所謂東洋道德者の道ではない。君は比較的に善良な人間である。すべての君の欠陥は、僕に云はすれば、君の薄弱なる意志から出て居るに過ぎない。根は中々正直な男である。之れはあながち『性は善なり』と云ふ東洋道德の御守札から割り出した勝手な理屈ではない。君の性の善なる事は、孟子より前に僕が實地に當つて認めた例證である。

特に僕が君と感を同しうする所のものは、虚榮功名心を極端に嫌ふ性癖を共有する點にある。虚榮とか、功名心とかでは充分その僕等の嫌ふ所のものを表現する事の出来ないのを残念に思ふ。

下らぬ見榮を張る事。知つたふりをする事。針小棒大を好む事。通がる事。

以上の言葉でも尙、充分満足なエクスペリションとは思はれないが、之より外に言ふ事が出来ないのだから仕方がない。要するに空虚な生活を譯もなく笑つたり嘔舌つたりして暮す者を指すのである。

二人はこの種の人類を嫌忌する事に於て、極めて同感である。二人の議論がこの事になると、痛快に一致する。そしていつまでも絶ゆる事がないその時ばかりは『東洋道德』も『亡國民』も、をとなしく影をひそ

めて、二人の談話の最も調子よく運ばるゝ時である。然し、こゝに面白い事は二人共、その原因を異にして居る事である。而かも各自特有の持論から生れて居る事である。君は感情の命するまゝに行動するを尊ぶ。それが爲にかゝる虚偽の生活を嫌ふのだと思はれない事もなからう。僕は又東洋道德の教（？）に従つて本能的に之を忌むのである。そこに君と僕との離れ難い絆があるのではあるまいか。

『東洋道德も大分軟化した』と君は此頃よく僕に云ふ。僕も又よく君がやゝ硬化しつゝある事を口外する。而して二人は妥協の道を求めて居るのじやあるまいか。然し二人は中々頑固である。人並以上に頑固なる特性を持つて居る。中々妥協の道は求められない事を信じて居る。僕とても今更弱音は吹き度くないから。

君と議論する時はよく、話が横道にそれる事がある。その情性で僕の此通信も大分脱線をやつて終つた。然しこの通信は君に僕が送る最初のものであるから、平常から言ひたかつた事がついにも出したに過ぎない。敢て大脱線とまでは言はれまい。

今日君に言ひ度い事は例の君の淋しさ悲しさに付いてゐる。僕は之を思出した丈でも可笑しくなる。然し君は極めて眞面目に悲哀を味つて居る。そこで僕は君に一言云ひ度い事があるのだ。君が怒つて『東洋道德』と大喝する事は既に既に覺悟の前だと思つて呉れ給へ。然し云ふ事は頗る簡單で短かい。それでは、あまり重みがなさ過ぎるので、前述の脱線理屈を添物に進呈した譯である。

第一に云ふ可き事は、君は學生の本分を知れりやと云ふ事である。僕はこの答として只勤勉あるのみと云ふ事を君に自覺して貰ひ度い。

第二に、君は感情に走り易い。——これは君の根本の意志である——だから女と云ふ者を人間らしい者と

思つて居る。それが學生としての君には大なる妨害である。

第三。君は愛情と戀とを混同し易い。人は情ありてこそ眞の人と云ふ事が出来る。然し情と戀とは別物にせねばならぬ。學生としては特に、そうである。

言ひ度い事は之丈である。他は君の反省に由つて補充して貰ひ度い。

之丈の事を別に手紙にする必要もないのだつたけれど、面と向つて言ふとなると、事が面倒になる。それに終りまで言はない内に、君の大喝に逢つては目的がとげられないから、故意に、郵便局の手を借りた次第だ。いづれ明日でも又逢つて、君の大喝を聞かう。失敬。

S 兄足下

公德は私情を沒せざるべからず大義まゝ親を滅す。理を談じて冷刻鐵の如きものを以て一概に無情漢となす勿れ。冷へたる鐵にも打てば美妙なる響あり。——橋牛——

M 生 拜

私は之丈の手紙を書くど、いゝかげんに疲れて終つた。生れて初めて、こんな長い手紙を書いた。今後もしにより外に、こんな長い物を書く必要は先づなからう。

四疊半の取散らされた部屋は電燈の明るい光のために比較的暑く見えた。外には秋雨が相變らずシト／＼降つて居る。

面倒だつたけれど、直ぐポスト迄これを出しに行つた。廣い通りは静かだつた。街燈が雨に煙つて見へる所など中々いゝ景色だと思つた。飯りに手紙を出した餘りの七錢で饅頭を買つて來て食つた。内心大いに苦

しかつたけれど。慾に打勝つのが私の主義であるから。

而してそのまゝ床に這入つた。手紙を受取つた時のSの顔を想像しながら寝て終つた。

## 二 散 步

翌日學校から飯ると先づ机に向つて勉強をした私には、それより外に仕事がないのだ。勉強がいやだとか、苦しいとか云ふ者の氣が知れない。自分等が勉強に離れたら暇で仕方がないと思ふ。それが決して淋しいのじやない。Sに云はせると、そこが所謂悲哀の起る點かも知れない。

勉強の時は殆ど何物も俗事が私の頭を襲ふ事がない。平常でもさうであるが近頃は時々Sの事を一人で考へ込む事がある。不思議でならないからだ。然し、いつもSの所謂淋しい悲しい事柄がはつきり判らないので、じれつたくなる。それだから、そんな下らぬ考の起る余裕のない様に勉強をする。それが濟んだら、孟子を讀む。時には小説を見る事もある。然しそれが私には一向面白くない。全く別世界の感がある。Sはそれを熱心に讀む。よくあんなに根氣がつくと思ふ位だ。而して小説から生きた教訓を得ようとする。全く、そんな點になるとSは氣の知れない俗人だ。然しSの事だから又何とか理屈があるに違ひない。そんな事は私に關係のないSの只半面に過ぎない。時にはSの方から近頃の小説の情落を聞かされる事がある。而して大いに氣焔に當てられる事がある。いや當られるのではない感心させられるのだ。小説の事になるとSは私より、まほそ學者だ。私の知らない知識をよく與へて呉れる。然し今の私には別段それが有益でもなければ必要でもない。只私はSの知識に感心する丈だ。要するに私は勉強より外には何も好きな道樂はないのだ。又私は勉強も道樂位に思つて居る。それ程私には勉強が苦にならないのだ。又さうある可きが當然だと思つ

て居る。

Sには中は道樂が多い。トランプをやる歌留多をやる。樂器でも大概の物はやれる。其外にも緻密な觀察力と經驗から得た、様々の能力と知識がある。その點に於て、私は全く無能である然しそれを名譽とも思はぬ代りに恥かしいとも思つた事がない。

夕食を濟ますと外に出た。美しい夕雲が高く高く飛んで居る。秋らしい肌寒の風が梢に囁いて居る。

私はSの家の柴折扉を靜かに開いた。庭に面した八疊の部屋の一隅に据へられたSの机の前にはSがぼつねんと坐つて居る。私の足音に見向きもしない。それはいつもSのする事である。夕方この扉を押して這入つて來る者は私だとSはきめて居る。だから別段ふり向きもせぬ。必要を感じる迄は言葉も掛けない。私もそれは充分呑み込んで居るが、今日のSは少し不思議な表情を示して居る。それが一概に私のあの手紙の爲だとは思はれない。その表情は恐らく、扉の開く音と全時に表はれたと思はれない程、Sは多少、をちつきを失つて居た。私はそこにSが私を避けやうとする小さい努力を認めずには居られなかつた。

『何處へ行く?』

『……………』

『手紙は見たか』

『うむ』

私は意外に思つた。今日の様に柔順な、いぢらしいSの態度を見た事がない。中々大喝を發する様な元氣は見えない。



『何處かへ行くのか』私は重ねて聞いて見た。Sは依然として沈黙である。私は小々癢にさはつて來た。Sは私を逃れて何をする氣だらう。近頃よく、私に離れて何處かへ行く事がある。私はそこにSの悲哀の原因を認めない譯には行かない。私は是非其その源を探り出して、Sに反省の道を示さねばならぬと思つた。

『散歩に行こう』私はSを誘つて見た。Sは首を振つた。而して今夜は行く處があるから飯れと云つた。私は飯らぬと云つた。又行くなと云つた。是非共行くなその行先を云へと云つた。Sは必要がないから云はぬと云つた。只、自分は正しい道を進んで居るから、心配せずに飯つて呉れと小さい聲で云つた。私は益々Sのこの柔順な態度が氣になつた。

『いや今日は行くな。行くなら俺も一緒に行かう』

『じゃ勝手にせろ』

かうなるとSは恐る可き人間だ。奮然立つて袴を着け帽子をかむり、竹のステッキを持つて飛出した。私も然し敗けては居らぬ。直ぐ杉の下駄を踏み鳴して外へ出た。Sは別段急いで逃げるでもなく程なく二人は肩を並べて歩き出した。電燈が付いて町は淡暗い夕暮に溶して一しきり車や人の行きかひのはげしい折だつた。二人は無言で歩いた。Sは時折ステッキを強く振りまはした。その風を切る音がビュービュー私の耳の側で鳴る。然し私は一寸でも身を引く様な事はしなかつた。わざと下駄に力を入れて踏み下した。又時折立ち止つてSは周圍を見た。そんな時は私は、そばからその姿を見守るに過ぎなかつた。突然歩き出すと思ふと急に止る。Sの散歩は次第々に亂調子になつて來た。時には五六歩かけ出す事もある。そんな時はいつも私が何かに見とれて呆然として居る時に限られて居る。Sは私を逃れようとして居ると云ふ事は、もはや

疑ふ餘地のない事實となつた。そこで私の決心も一層固くなつた。而して一寸でもSから目を離さない様に努めた。二人は大概並んで歩いたが時には、群集に、遮られてうろたへる様な事もあつた。夜は全く暮れた。街の兩側には電燈が明るく輝いた。群集は、ごよめきながら流れて行く。車の響。足音の亂るゝ音。これ等は、烈しく私等二人の周圍に繰返されて起つた。Sの歩調は早くなつたり、遅くなつたり、全く今は、取り亂れて終つた。私はSが逃れんとして逃れる事の出来ないデレンマに苦しんで居るのを痛快と思つた。突然Sは私の顔を見つめて立止つた。私も負けずに、睨み返してやつた。Sの口のあたりの筋肉がピリピリと震へた。と思ふと、恨めし相な視線の流が私を射た。それでも私は顔色を動かさぬ様に力んで立つて居た。二人の側には又烈しく動搖が起つた。Sは靜かに歩き出した而して、はじめて口を切つた。

『一体、どうする積か』

『俺は散歩して居る』と私は答へた。

『さうだ。俺も散歩して居る。而して二人の方向が偶然一致した丈で、一緒に散歩して居るのぢやない。俺は自由の行動を取つても差支へない。一人で勝手に散歩して居るのだ』

『その代り、僕も自由の行動を取る。敢て君について行くのぢやない。永久に方向が一致した丈に過ぎない』と然も敗けぬ氣でやりこめてやつた。

Sはそのまゝ又沈黙に返つて歩き出した。私は又心の中で痛快を叫び乍ら、注意深くSを見守つて歩き出した。Sはステッキを取り落して二三歩後に返る様な事をした。私はSのこの巧なやり方に感心した。而して尙一層、眼を見張つてSを目守つた。

二人は賑かな町を歩いて居た。Sの目は左右前後に烈しい運動を始めた。今が大切な時だと思つて私も、注意を怠らなかつた。やがて又静かになつたSは私をふり反つて笑つた。その笑は嘲笑でもなく可笑しさの餘りに浮ぶ笑でもなかつた。残酷な笑だつた。好奇に燃えた笑だつた。Sは絶望をこんな形式の笑に表はしたのではないかと思つた。而して、いよいよSは逃れる事が出来ないのだと思つた。痛快な勝利の叫が再び私の血液に漲り渡つた。然し意外だつた。Sは立ち止つて、町寧に時計を出して見てかう云つた。

『今から五分の内に、逃れて見せる。屹度はぐらかして見せる。用心せろ』

私は驚いた。然しその驚きは一寸の間に過ぎなかつた。如何にSが巧みに目をくらましたとて、什して逃れることが出来よう。今迄の暗闘の結果でも明白である。私は奇蹟を製作しやうとして失敗に終るSの前途を確實に見抜く事が出来た。

人『よし。やつて見ろ』私の聲は好奇心に震へて居た。

それから後のSの態度は全く、死物狂であつた然し私も平然として居る譯に行かなくなつた。二人は相變らず烈しい暗闘をつゞけ乍ら五六町も歩いて行つた。群衆が次第に多くなつて、二人の周圍は益々動搖して來た。すると、目前一町あまりの所に電燈で飾られた美しい建物が見えて來た。樂隊のさばがしい響も縫れ縫れて響き渡る。それは活動寫眞を興行する家である。私は嘗てこんな物にはいつた事がない只、表の繪看板を時折見るに過ぎなかつた。Sの步調は突然ゆるやかになつた。而して左手を懷に入れて何かごそ／＼と騒動をはじめた。チャランチャランと云ふ錢の響がSの懷で起つた。

『あッ』と私は思はず叫んだ。

『どうか。降参したか』はたしてSは得意の色を浮べて私を見守つた。私の頭の中では、烈しい動亂が繰返された。それは私が金入れを忘れて來た爲だつた。然し私の頑固はどこまでも私を見捨てなかつた。『なに平氣だ』はいつて見る』と私は叫んだ。Sは少々驚いた。私は私の虚勢が成功しつゝある事を信じた。ばねじてSは、その建物の前を素通りして行つた。私はもう大丈夫だと思つて、ホツと吐息をついた。然しその吐息の終らぬ内にSは猛然と走り出した。私も驚いて走り出すと、Sはいきなり右に折れて、その突き當りにあつた一軒の湯屋の暖簾の内に消えて終つた。懸命に走つて來た私は、その暖簾の前に棒の様に立ちすくんで齒を食ひしばつた。

### 『畜生。取りにがした』

どうとう私はSの爲に五分とたゞない内に、はぐらかされて終つたのだ。私の無念はその頂上に達した。然しだんだん冷靜になつた私は、決して絶望でない事を知つた。Sが私を逃れようとするのは私を逃れて、どこか秘密な場所に行くのが目的なのだ。決して風呂に行くのが目的ではない、只手段に過ぎないのだ。

『俺はSが出る迄、こゝで待つのだ』と固く決心した。どうしても私はSを私の假定したその秘密の場所にはやらないのだ。私は勝利者だ。決して、はぐらかされたのではない。Sはこの暖簾の内に小さくなつて居るのじやないか。私は又痛快と思つた。暫く物影に身をひそめて居ると、元來が入浴の目的でないSは案外に早く再び、その暖簾の外に現れた。而して東の方に昇つたばかりの満月を仰ぎ乍ら、私の前を通り過ぎて行く。私はこつそり二三町彼の後についた。彼は時計を出して見て首を振つた。その時計は止つて居たらしく、彼は街側の家にかゝつて居る時計をのぞいて見て居た。而して急ぐでもなく月を仰いで歩いて行く。

それは私等が來た方の道である。私はいきなり後からSの肩に兩手を掛けた。而かも靜かにそれを行つたが、Sの驚きは私の兩手に傳はつて、ギクリとした。Sはすくなくからず驚いたらしい。然し決してSはふり返らぬ。そればかりではない依然として靜かに歩いて居る。こうなると、少々私の方が手持ち無沙汰の氣味になる。どこまで頑固なのだか底が知れない。

『わい』と私はたまり兼ねて、Sの体を兩手でくるりと後にまはした。

『何だ』Sは平然として居る。

『もう頑固は大抵にして一緒に飯らう』

『こんな弱い音を吐く積じやなかつたけれど、どうしたはずみかついこんな事を云つて終つた。そして、しまつたと思つた。案の掟Sは平然として』

『俺は一人で自由に散歩して居る』とまだ頑固な事を云ふ。私は癪にさはらざるを得なかつた。

『それじゃ、俺も自由の散歩だ。然し、俺から離れて行き度い所に行く事は出来まい』

『私はこの言葉で又私の勝利を感じた。Sは何とも言はない。又その顔の表情も見ること出来なかつたが、がすかな吐息を漏した。私等は又數分前の暗闘に返つた。Sは又突然群衆の中を縫つて烈しい勢でかけ出した。無論私も、すぐその後につづいた。今度は中々止りそうにない。明るい街を走るのだから人が驚いて見て居る。それが前に行くSを見るのでなく私ばかりを見る様な氣がして、腹が立つてならない。どこまでSは私を苦しめるのだらう。それに走るに従つて犬が吠へ付くには全く閉口した。それが皆私に吠へ付くのだ。路傍に寝て居る犬がSの足音で驚いて起き上る。そこへ丁度私が追掛けて行くのだから皆私に吠へ付いて來

る。あまりいゝ心持ではない。然しこゝで閉口して終へばSを取り逃さねばならぬ。それが如何にも残念だ。かみ付く様な事はあるまいと思つて追つて行く。然し歩調が自然にをそくなる。Sはどんどんかけて行く。突然暗い横道に消れて行つたの後を追つて私もその角を曲ると、もうSの姿も見ぬ。走る足音も聞こぬ。明るい所がら急に暗い横道にはいつたので、目がくらぐらして何も見ぬ。遂に見失つて終つたかと思ふと、残念で残念で堪らない。背には汗がダクダク流れる。呼吸は苦しく追つて目がくらみ相だ。私はどうする事も出来なかつた。只呆然として行手の闇を見つめるばかりだつた。全くその横町は闇であつた。美しい月の光も全くとどかない程、高い建物にかこまれた細い路であつた。空ばかりは徒らに明るい月光に満ちて居る。然し横町は益々暗く見ゆるばかりだつた。すると、驚いた事には、突然、その闇の中からSの聲が聞けたのだ。

『わい、一寸來て呉れ』

然かもその聲はすぐ私の傍から起つて来る。

『ごこだ。ここに居るんだ』私は、うろうろ見渡した。けれ共、ごことも見當が付かない。

『君の間ばかり前だ。倒れたのだ。くるぶしを強く石にぶつ、けて血が出ていたいのだ』

成程、手さぐりに行つて見るとSが地面に、あぐらをかいて足を撫でまはして居る。

『ひごく、いたむか』

『何に、そんなでもない。すぐよくなるさ』

『歩いて飯れるか』

『大丈夫だ』

Sは勢を付けて立ち上つたが、ヒョロ／＼とよろめいた。

『大丈夫か』

『男だ』

二人は程なく並んで歩き出した。いつの間にか川岸を歩いて居る。清い月の光が水に映つて繪の様だ。私はSに妥協を申込んだ。Sも今度は承知した。それで仲なほりに敷嶋を買へと云つた。Sは金がないと云つた。

『だつて、さつき電氣館にはいらうとしたじゃないか』と私は詰問した。

『只はいらうとした丈だ。實は七錢しかなかったたので、はいれなかつた』

『わッ。それじゃ俺を虚勢したな』

私は又Sの頑固と虚勢の巧妙なのに驚いた。實は私も、その時虚勢したのだつたが、そんな事は思ひ出しもしなかつた程、Sの巧妙に感服して終つて居た。それで七錢の内風呂代の二錢を差引いた残りの五錢で、ゴールデンバットを買つて二人は吹かした。

月の美しい河畔の逍遙は何とも云へなかつた。とても私の様な者の有するすべての美の形容詞をさらけ出したとてその美しくさ、その静けさを表現する事は永久に出来まい。私はこの美に對して聲高く詩を吟じた。私は決して詩吟が上手ではない。然しこの時の調子は又格別の趣があつた。對岸の森に反響してその余韻は河面を靜かに亘つて消えて行つた。私は何も彼も忘れて只となつた。けれ共Sはさうではなかつた。絶

へす月を仰いで嘆息した。そしていゝ月じやないかと云つた。

うむいゝ月だと私は答へた。所がSは私にもそれが美しく見へるのが不思議だと云つた。而して最後に、月を見る瞬間に於ては何人も詩人であると云つた。私は又た株がはじまつたなと思つた。然しそれなりでSは再び沈黙に陥つた。私は次第にそのSの態度に心を惹かれて行つた。而してSが淋しい悲しいと云つた事を思ひ出した。と同時に昨夜の長い手紙の事も、今日Sが私を避けようとした事も思ひ浮んだ。而して、そこに決解の付かない問題が残つて居るのに氣が付いた。そこで私はSに、女のために心を亂されて居るのじやないかと聞いた。之は薄々私にさう思へたからである。Sは、まあさうだと云つた。私はSに馬鹿だと云つた。女は人間じやない。もつと下等な動物だと云つた。Sは顔をしがめて『東洋道德だ』と云つた。私は少々癪にさはつたので、さうじやない君が『亡國民』なのだ云つた。Sは、そんな事はどうでもいゝ俺は正しい道を進んで居ると云つた又、東洋道德も手の出せないむづかしい問題があると云つた。私は重ねてSを馬鹿だと云つた。そして昨夜の手紙を何と讀んだのかと聞いた。Sはそれには答へないで、俺は今日、可哀相な事をした。可哀相な女を淋しい旅に立たしたのだと云つた。私はSのその云ひ草が癪にさはつた。然しSは一向頓着なしにその女の出發を送る事の出来なかつたのが残念だと云つた。私は益々Sの態度にあきれた。Sは元來、こんな事によく涙をこぼす男である。女が何だ。劣等動物だ。譯の解らぬ事を解つた様に見せかけて男の保護を強請する怪物だと云つてやつた。

Sは笑つた。而して君は無邪氣だと云つた。何と云ふ生意氣な言ひ草だらう。私は強ひて沈黙を守つて居たが、何とも云へないゝやな感に襲はれた。



『然しもう何事も無言の内に解決された。而して僕は遂に正しい道を進む事が出来た。或は君の御影かも知れぬ、然し悲慘な物語だ』とSは云つた。私はさうした人間の心持を了解するに苦しむ。女の爲めに泣いたり笑つたりする人間は、無學な下劣な男と思つて居る。それをSは時折實現する。私は少しでもそんな人間の心持を知り度いと思つた。それで好意を以てSに、その悲慘の物語を要求した。Sは然し今日は云へぬと云つた。私はなせだかそれが解らなかつたが只きまりが悪いのだらうと思つた。然しSはその積りでない事がすぐ判つた。今夜は苦しいから言はれぬと云つた。なせ苦しいのかと私は尋ねた。Sはその悲慘の物語が今夜はじめて解決されたのであると云つた。又その解決が極めて殘酷であるからだと言つた。然し今夜はSは私と一緒に歩いた丈で、一寸もそんな悲慘なロマンスを行ふ様な暇はなかつた筈である。けれ共Sは、さうでないと云つた。今夜とその物語は離れ難い關係があると云つた。そしてそれなり全く口をきかなくなつて終つた。

それから二三日の後私はSから次の様な長い長い手紙を受取つた。而して總ての不思議が直ちに解決させられたと同時に、私の固い固い主義が、すこしく、ぐらついて來た。女が人間らしい者と思はれる様になつたのが第一のぐらつきである。それ以來、私は所謂東洋道德をSに振りまはさない様になつた。それには深い譯はない。只私は一人で考へて一人で解決を着け而して新らしい主義を創造しなければならぬと云ふ必要に迫られたからである。それと反對に私は益々その亡國的思想を捨て、健實なる主張を要求する様になつた。

私が軟化したのかSが軟化したのか。それは判然しないけれども、二人の極端に異つた主義思想が互に融和して、同一の物に變らうとする傾向は確かに認められない事はない。

要するに私の信念に最初の打撃を與へた物は即、次に掲げるSの悲慘な手紙である。

### 三 Sの手紙

M君足下

初秋の月の光が、なごやかに宵の世界に満ちて居ます。私は庭に面した私の部屋の椽にしゃがんで、ぼんやりと、庭の一隅を見つめて居ます。そこには四季咲きの白バラが、折からの月を受けて灰白く、あはれに、淡暗い片隅に、浮かんで居るのです。營養の足りないその薔薇は、葉ばかり繁つて、ほんの名ばかりの、哀れな花を開いて居るのです。周囲には何の音もない。すべてが死んだ世界の様に静まり返つて居る。そこに只一輪の、哀れな白い花が、月の世界にも物はゆげに、かすかに吐息をついて居る。何と云ふ、物やさしい眺めなのでせう。私はこうした夜の眺めの中で、數ヶ月前から、私の心に萌へ出で、而かも、はかなく枯れてしまつた戀の芽生を思ひ出しました。私の思ひ出は、正しく亂れずに、しかも靜かに、私の腦漿にその影を落しつゝ、亡つて行く。この嘘りなき告白を、かうして私が、月に輝らされた白薔薇の花を眺めながら、君に移す事が出来たなら、どんなに幸福だらうと思ひます。私の腦に落ちるその影と同時に、君の感覺にも同じ影がさして、私が、時を追うて繰りひろげる思ひ出の一節一節が同時に君の知覺に觸れて行つたなら、私は苦もなく、この悲慘の物語を告げる事が出来るでせう。なまなかに、文字に表はして告白しやうとする私の心持は、中々に苦しく辛い物だと思つて下さい。

こんな事を書く君は又、さの云ひ相な事だと笑つて了ふかも知れない。けれ共、君とても、自然の力に生ひ立つたしかもはかない白薔薇の一枝を、荒々しく折り取つて、私のこの尊い冥想を破る程の冷鐵でもない事を私は深く信じて居ます。

冷鐵打てば鳴る——と君は先日の通信に記して居る。君の半面を知る者は、やはり私でなければならぬ。君には全く、情と徳とが圓満に調和して發達して居ると私には沁々思はれるのであります。君を一概に無情漢となすものは、その最も誤れる者である。私に云はすれば、君は人一倍、涙もろい善良な青年であるのであります。

君は又、私に取つては如何にも力強い君主である。しかもその君が社會に對しては如何にも小さい弱者ではありませんか。君は五錢のゴールデンバットを買つても、マツチを貰つて來る事の出来ない人間である。人の家庭に入つて碌に挨拶は出来ない人間であるのであります。君には、すべてのこれ等の物が、下らない俗事に見るのでせうけれど、世の中は、この下らない事を眞面目に繰返して行く團體なのであります。君は換言すれば、いづこまでも善良に發育した人間であつて、その結果として常に暖かい心持を失はないと同時に、その氣分に、縛ばられて自由を失つた不具者ではありますまいか。六ヶ敷い理屈は云ひますまい。要するに、君は道德的感念の明かな青年であるが最も世馳れない、はにかみ屋の一人であるのであります。尙一歩進んで、君の道義的感念は、私の云ふ所の社會なり人間なりを鐵面皮な輕薄漢であると思はせて居るのであります。然し社會は、君の見るが如く秩序正しき道德的團體ではない。社會の如何なる片隅にも常に聞き得る物は利己の叫であります。

君は極端に利己を嫌ふ特性を持つて居る。而してその利己の解釋が又頗る極端である。

今こゝに罪人があるとすると、それは非常な罪惡を犯した恐る可き罪人であるとし、その罪人が、自分の犯した惡事を思ひ出す毎に良心の呵責に堪へないで遂に改心して正しい道を求めたとします。その心理な行為なりを君は利己であると云ふではありませんか。自分が良心の呵責に堪へず日夜苦しむで居る。若し正しい道に進んだなら所謂罪亡ばしが出来て幾分自分の心持が安らかになるだらうと云ふ利己的感念から生じた行為であつて明に之は利己的行為であると君は私に云つた事があります。

これ程極端に利己を擴張し而して利己を嫌忌する君に、この社會の至る所に聞かせる、その利己の叫が聞けないのでせうか。それ程君は、世間馴れない、道徳的人物であると同時に、一面から云へば下らない理論家ではありますまいか。

話が十分横道にそれました。これは只先日君の通信に對する御返事です。敢て反駁論とは云ひ度くありません。君に要求する所の物は要するに、社會に對する深刻なる觀察力なのであります。

偕て、本題に返つて。その白い薔薇の花がですね。その蒼白い夜の、しゃまの内に物淋しく吐息して居ると思つて下さい。そこで私が、過去を思ひ出して、嘘りなき告白を君に告げるのであります。この私の告げようとする、悲惨な物語は、白薔薇と月の光と、死の様な静寂が、促した次第なのであります。多少君の觀念に反映する事でもあれば私は何より、それを悦びます。

なるべく平易に公平に、この物語を終る事の出来るために、時日を追ふて、思出を繰返しませう。

偕て、九月と云つても、學校の新學期の始る頃は、まだく暑い盛であります。この暑い盛に又私は、樂

しいなつかしい父母の家から、別離の淋しさを携へて熊本に参りました。人一倍、親をなつかしむ私は、いつも學期始めの熊本の生活は、淋しい淋しいものであります。この淋しさの中でも、する事丈はやつて行かねばなりません。丁度熊本に来て二日目の午後、暑い日盛りを私は、市の西方の高臺を登つて行きました。それは私が國を立つ時、祖母に頼まれた義務をはたすために、或る家庭を訪問する爲でありました。その家庭の人々は、近頃、東京から引越して來たので、在京中特に親しく私の祖父母の家庭と出入して居たださうです。

番地丈は聞いて來ましたが、家を探すのに大分暇取れて、いよく私がその玄關に立つたのは三時近くでありました。

私が、そこに立つたその瞬間から、この物語の發端が運命付けられたのであります。少し開いた儘になつて居る襖の奥に私はこの物語の女主人公を見出したのであります。彼女は、初めて逢ふ私にも驚かるゝ程蒼白い顔をして、緋色の燃ゆる様な友禪の帶を、つゝまじやかに結んで、針仕事をして居ました。この不思議な色彩の對照に先づ私は、好奇の瞳を見張つたのであります。

やがて目的の御老母の案内で、涼し風の自由に通ふ、若葉の庭に面した、客間に導かれました。床の間の五色のダリヤの花瓶が先づ私の視線に觸れましたが、次の瞬間には、客間からは右の方に見へる彼女の横顔が私の平衡を危く亂しかけたのであります。御老母は、初對面の私を孫かなんぞの様に取扱ひました。一應挨拶の済んだ後、御老母の家庭は御主人が官を退いて後は唯、一人の娘と下女と四人で、全くの樂隱居をして居ると云ふ話を聞きました。至つて御老母は話好きで誰でも訪ねて來る者は、迷惑する程引止められるの

だそうです。未だ引越して来て間もない事故、知人とてもなく誠に淋しく暮して居るから、今後は毎日の様に來て呉れろと、繰返し／＼御老母は物語られました。丁度御主人は、見物旁々散歩に出られた留守でしたので、大分長い事引止められました。

歸る時にはじめて私は御嬢さんに紹介されました。

『これが、たつた一人の娘ですよ』と御老母は小さな聲で引合せをして呉れました。御嬢さんはつまらなさそうに、軽く頭を下げたまゝ、又針仕事をつづけてゐました。門を出る時、ふり返つて見ると、やはり御嬢さんは、襖の奥に、淋しさうに座つて居ました。その蒼い顔と、紅い帶の對照のみが、いつまでも私の頭に残りました。

その後二三日して、月の美しい晚夕方から本妙寺の郊外に散歩した私は、『飯りに又その家庭を訪れました』丁度御主人も在宅だったので、色々話が進みましたが、私は不思議に、重苦しい氣分に襲はれました。それは御嬢さんの事でありました。彼女は、先日と全じ場所に、同じ様に坐つたまゝ、先日と同じ襦袢の袖を縫つてゐるのです。

その袖には、アツシリアン式の青い海原と白い鳥とが調和よく配列されてゐるのです。而して私が飯る時にも、先日と全じ様に、坐つたまゝ、軽く頭を下げた丈であつたのです。

その次に訪ねたのは、初秋の美しく晴れた日曜の午後でした。御嬢さんは、相變らず、同じ場所に坐つたまゝ、例の青い海と白い鳥の袖を縫つてゐるのです。

『御嬢さんはこないだも、その袖を縫つて居ましたね』と、あまり不思議に私は尋ねました。

『ねえ。氣に入る迄、幾度でも幾度でも、縋ひなはすのですもの……』

この音は、極めて。かすかで終りの方は、殆ど聞えなかつた。すこし紅味を帯びて來た、その皮膚は京人形を思出させる様に美しくありました。私は、この御嬢さんに、大きな京人形を抱かして寫眞に取つたら、どんなに美しくからうと思ひました。この日は御嬢さんも中々快活に會話をしました。御老母は御嬢さんの一語一語に聞き入る様に首をかしげては、しきりに御嬢さんに話させられました。馴れるに従つて御嬢さんの態度も、落付いて來し、私等は、様々の物語を飽かすしました。殊に御嬢さんの言葉には、深い注意を拂ひました。歸る時も、この日は珍らしく、御嬢さんから、又遊びにいらつして下さいと云ふ優しい言葉を聞きました。

其後暫く學校の急がしさに打忘れて訪問も、しませんでした、數日の後。それは秋雨の淋しく降りしきる夕暮時。軒をかすめて飛んで行つた白い鳩の一群を見て急に御嬢さんがアツシリアン式の袖の鳥を思ひ出して、雨にくじんだ街燈に輝らされながら、久し振りに訪問いたしました。

玄關に立つて訪れると、

『Sさん？　ねえ上んなさいませ』と珍らしく、お嬢さんの聲であります。茶の間に上つた私は、又、同じ所に同じ様に坐つて、青い海原と白い鳥の袖を、いじくつて居るお嬢さんの美くしい指先を見ました。その夜は又雨の降るにも拘らず、御主人御夫婦は、町の芝居に行かれた留守でした。

こんな事は、はじめてなので

『芝居が御好きなんですか』と聞いて見ました

『三度の御飯よりもよ』と云つて御嬢さんは、縫ひかけの袖を口の前にとり、あてふ笑ひました。何と云ふ美しい姿でせう。

『なせ、あなたは留守番なさるんです』

『私、行き度くないのよ』

『芝居はね嫌ひですか』

『……………』

『そして、なせ又いつまでも、同じ袖を縫つて居るんですか』

『その譯が聞きたくつて』

『だつて、不思議じゃありませんか』

『……………』再び私はね嬢さんを沈黙させて終ひました。若い女と對座する時に、いつも起る様な不安な静寂の内で何か新しい話の緒口を見出そうと長い間、努力してゐる内に突然

『その譯はね——』と云ふ、御嬢さんの逆襲に會つて、少々、驚きました。

『その譯はねー。芝居に行かない譯と、同じなのです』

『へー？ 芝居と、その袖に何か深い關係でもあるのですか』

『アラ、そうじゃないわ』

『じゃなせです』

『下らない事よ』



『妙ですね』

『不思議なんですか、又』

『謎の様ですね』

『謎じやないわ。可哀相な話よ』

『わゝ？』私は驚きました。

『知りませんわ』

『だつて、可哀相なこ云ふのは何なのです』

『私よ』

『どうして』

『その譯はねー。やつぱり、芝居に行かないのと、同じ話ですわ』

どこまで行つても、話は發展しない。結局は、芝居に行かない譯に返つて来る。

『だつて私には、その譯が判らないじやありませんか』

『あら濟みませんわ。そんなにらさんをわづろかして。堪忍して頂戴な』

『何も、あやまる事はありませんが………』

『あやまる事はないが、譯が判らないと、仰被るのですか』

『に』

『だつて、云へないのですもの』

『なぜです』

『あなたが、下らない事に頭をを使ひになるから云へませんわ』

『どうしてなのです』

『……………』又た嬢さんを沈黙さして終わりました。雨の音はしきりに軒に鳴つて居ます。風さへ加はりて、やゝ物凄しい天候が、家内の明るい電燈の下にまで傳はつて参りました。

『いやな天氣になりましたね』

『……………』

沈黙した、た嬢さんを氣にも止めないで、私は盛んに貰の煙を輪に吹いて居ると、突然た嬢さんは、縫ひかけの袖に面を伏せて吐息をつきました。

『どうかしましたか』

『……………』沈黙は時折、苦し相な吐息に破られました。

『泣いてゐるんですか』

『……………』

『どうしたんです』

今は、たまり兼ねて、た嬢さんの、すゝり泣く聲が、しく／＼と響きました。私は、あまりの不思議に驚きました。何と云ふ謎の様な晩なのでしょう。かう云ふ事に、あまり馴れない私は、遠まわしに慰めて、歸り仕度にかゝりました。君は笑ふかも知れないが、その時の私には、よほど苦しい暗闘があつたのです。自然

の命するまゝに行動する事を最も尊い物であると信じてゐた私の信念にその頃、漸く道徳的感念が曙の初光の様に射して居たので、私は敬遠主義を取つたのであります。

これが私の最初の道徳的の試みであつたのであります。

其翌日の夕暮。私は思ひ掛けずも、お嬢さんから長い手紙を受取りました。お嬢さんは私に戀して居たのであります。而かも、頗る不健實なる戀に悶て居たのであります。戀すると云ふ事は、本能的に不可抗力の物であつて、自然の命令そのまゝである。而して最も尊い物であると信じて居た時代の私なら、お嬢さんのこの戀にも暖かい同情の念が生じたのでありませう。然し當時の私には、内的の苦悶に依つて道徳と感情とが、はげしい争闘をつゞけつゝあつた爲に、之れに同情を表する余裕は、すこしもなかつたのであります。彼女の手紙の最後に、次の様な文句がありました。

青き波と白き鳥の片袖は、いつまでもいつまでも縫ひ上げる事なくそのまゝに致し置き度く存じ申候。

オデッセーの昔物語にも王妃の夜な夜な錦の織物の糸を、はぐして戀を逃るゝ悲しき節有之候。妾事も、この袖の出来上らん時は、心にもなき結婚に強ひられて、悲しき辱しめを受けねばならぬ事とて、なかなか、縫ひ上げ兼ね申候。妾如きは結婚の價値なき者と深く信じ居り候へども御兩親様の御心痛を思へば、やすやすと、御斷りも申上げ兼ねてそのまゝに相成り居り候。

せめてもの御願には、たよりなき妾の苦しき胸御察しありてやさしき御言葉賜はらん事重ねて申進めまゐらせ候。

すべてが、こんな風で頗る要領を得ない長い手紙でありましたが要するに、いやな結婚に強ひられて苦し

むでゐると云ふ、たよりない通信でありました。然し私にはどうしても判然しない所が多かつたのです。人並以上に美しい、しどやかな嬢さんがどうして結婚の價值がないのでせう。又人並以上に御両親に可愛がられてゐる彼女が、どうして心にもない結婚を強ひられるのでせうか。私は全く彼女の言葉に信を置く事が出来ませんでした。そればかりではなく、彼女は、こんな事情を拵へて私の同情をそゝるのではないかとまで疑ひました。そんな不健實な嬢さんとも思はなかつたのを私は残念に思ひました。又腹も立ちました。それで殊更訪問を見合せてゐましたが御老人から、なせ遊びに来て呉れないかと云ふ厳しい葉書を受取つてから、急に私の下らない考を捨てゝ訪問する事に致しました。それは秋には珍らしく寒く淡曇つた日の午後でした。

勝手を知つた私は、案内も乞はずに裏口から、上つて、茶の間に來ましたが、いつもその同じ場所に居る筈の嬢さんの姿が見えないばかりか、家の内は、ひっそりとして人の居る様子もないので、八畳の客間の襖を押し開くと、そこに嬢さんが杜の花瓶に、コスモスの花を延び上つて生けて居るところでした。

『嬢さん』私は靜かに、後方一間ばかりの入口に立つたまゝ、かう呼びかけました。

『わッ』と云つてふり返つた彼女の眼は、塗物の様に光りました。と同時に、手に支へて居た花瓶は花と共にぱつたり落ちて、水がざつと壘に漲り花瓶は、ほろ／＼と崩れました。彼女は蒼白い顔に、驚愕の苦し相な表情を表して、崩れる様、ぱつたり座つたまゝ、私を睨みつけて次の様に叫びました。

『Sさん。あなた見たでせう』

『何を?』

『私の、私の足を……』かう云つた彼女は、張り切つた氣がゆるんだか、ワット泣き崩れました。

『どうしたのです。どうしたのです』

『いゝね。あなたは私の足を御覽になつたでせう。結婚に苦しめられるのもこの足のため。芝居に行き度くないのも、この足のため。私はこの足のために、死ぬより辛い思を幾度したか知れませんか。幾度悲しい恥をかいたのか……』

すうり上げては泣くその聲の相間々々に、火の様に熱した彼女の唇から、驚く可き事を私は聞かされたのであります。

「君足下。彼女は跛足びつこだつたのであります。それが爲に結婚期の近付くにつれて、御兩親の御心痛を思つて物々しい彼女は一圖に悲觀して泣き暮したのだそうです。今迄も度々嫁にと云ふ申込をして來た者も、跛足だと云ふ事を聞いて、一人も相手にする者もなくなり、父上母上に御心配かけるのが、辛らさに消え入る様に悶もて居たと彼女は申しました。そこへ丁度二三ヶ月前に、跛足を承知で嫁に貰ひ度いと云ふ申込があつたので、御兩親は大喜びで約束をして終つて、近日中東京のその良人の側に行くために、先日から、あの繻絆じゆばんや色々の仕度をされたのだそうですが、可哀相にその良人は四十に近い齡である上に、二度迄も、今迄奥さんを替へられたのだそうです。

御兩親に心配させ度くないと云ふ優しい一念から彼女は、この結婚を斷りもせず、命令のまゝに死んだ積りで嫁いで行くのであります。けれ共、まだ十九と云ふ娘盛りの而かも美しい彼女が、例へ跛足であつたにしても、こんな苦しい結婚をせねばならぬと云ふのは何と云ふ悲惨な事でありませうか。社會は無情であ

る利己である。かゝる可憐な少女を悲惨な境遇に運び去つて、而かも道義正しき團體であると云つて居るのであります。

彼女の道に反した。私への戀は實に彼女の初戀であつたのであります。而して恐らく最後であるのでありませう。道徳の感念の極めて、新らしかつた私は、道徳を呪ひました。そして一圖に自己の力の偉大なるを尊いと思ひました。道徳の絆はかほど迄に可憐な彼女を私に、靈的に救ふ事を妨げるのであります。彼女は、私のやさしい同情と暖かい戀の擁護なくしては、前途に生活の出来ない程の悲惨を控へて居るのであります。跛足が何で戀の妨にならうか。私は甘んじて跛足の彼女の戀を納れ度い。而して彼女の淋しい半生の保護者とも力ともなり度いのであります。而し社會は冷酷であります。道徳は利己に過ぎないので。社會の人は跛足なるが爲に彼女を嫌ひ、道徳は道に反すると云ふ只一事の爲に彼女を悲惨な苦刑に導くのであります。石の様に立ちすくんだ私は、御兩親が丁度その時風呂から歸つて來られなかつたなら、彼女の顔に頬ずりして、私はその殊勝な彼女の決心を賞讃したのであります。

『暫くでしたね』と湯上りの赤い顔を、てかてか光らして御主人は快活に笑はれました。

私は挨拶に窮して、もじもじしてゐると

『前は又、どうしたの?』と云つて御老母はた嬢さんの方を眺めました。私は背から冷水でも掛けられた様に、はつとして色を變へました。

『花瓶の水がこぼれたので拭いて居ります』と答へた彼女の言葉は、印判で押した様に四角四面な落ち付かない返事でありました。

而しその場は、あまりきまりの悪い思をする事なく脱れる事が出来ました。

御主人と對坐して、た定りの俳句の講釋に當てられて居る間も、私の頭の中は住み荒らされた古寺の高い梁の間に見出された蜘蛛の巢の様に、目茶目茶に亂れて終ひました。私の心の内では、道德と感情とが又新しい争闘をはじめて、中々をさまり相にも思はれません。私はどうく御いとまして、夕暮の薄冷たい風に吹かれながら、阿蘇の裾野に燃ゆる夕焼雲を眺めて、高臺を町へと下りました。

其後數日間の私の心の苦悶は中々筆紙につくせる物ではありませんでした。私は勢銳く戀に進もうとして、道德の強い方に縛られた囚人でありました。以前の私であつたなら、道德の力の極めて不自然であつて人爲的の製作物に過ぎないと固く信じてゐた時代の私なら、何のためらう所もなく、善かれ悪かれ決心する事が出来たであリませうがなまなかに君から受けつゝあつた道德的敎化を味つてゐた爲に一層苦しい争闘を引起したのであります。

私は時折、興味を中心とした所謂新派の芝居を見る事を一つの樂しみとして居ります。生活そのものが、そのまゝ詩であり歌であり劇であると云ふ主張の下に生れた近頃流行の創作物に耽讀して深刻なる文字をも多少悦ぶ私が、勸善懲惡のこれ等の芝居を見る事は、最も荒んだ時の心持に一時的の弛みを與へる策と云つても差支へあります。この私が、こうした芝居の生命とも云ふ可き社會の奇績ミラクルを全然肯定する事の出来なかつた物が、た嬢さんの悲惨な境遇を目撃して以來自然に一層悲しい社會の裏面を見る様になつたのは全く事實でありました。と云つてた嬢さんを新派悲劇の立女形たてなまに焼直して、この手紙の艶を増そうなどと云ふ無謀心は藥にしたくも無いのであります。この事は、あらかじめ君に云つて置かねばなりません。

私はこの數日を全く思ひ煩つて暮しました。校庭の柔かい草の上に大の字なりに寢をべつて、高く晴れた青空に沁む様に消えて行く白雲の様に見入りながら彼女の事を考へた事もありました。

而して彼女のみじめなる境遇を新たに私の頭に繰りひろげて見た事もありました。

不具者。兩親の心痛。之に伴ふ女の切なさ。進まぬ結婚と生涯の良人。

斯様にならべ立てゝ私は彼女を如何に處定すべきか、又彼女は如何に成り行く物かと云ふ事に付いて頭を悩ました。最後に彼女の初戀を思ふ時、私の心ではその苦悶惡闘が頂上に達するのでありました。私は、この内的の苦闘に付いて多く語り度くありません。それ程私の考は、薄弱で不道德な物であつたのであります。然し私の心には私一個の利慾の爲に戀を納れ様なぞと云ふ、さもない考は毛頭なかつた事を告白して置かねばなりません。敢て私が利己的ではなかつたとは云ひません。何となれば君の目には、すべての物が利己的であると思はれるからであります。

彼女はその跛足を知つた爲に私が彼女を嫌ふ物と固く信じてゐるらしいのであります。これは一概に不具者のひがみとは申しません。誰しも斯くある可きが人情であらうと思ひます。然し私一個の利慾の爲に動かなかつた私には、そんな考は全くなかつたのであります。それが辛いのであります。私は今こゝで手をひいたならば永久にこの心持を彼女に告げる事なく誤解されたまゝに終らねばなりません。辯解とか言ひ譯とかは私の最も嫌ひな手段であります。然しこの事ばかりは彼女に告げ度いと思ひました。それは、あながち私のこの告示が私一個の爲でなく、彼女に對する暖かい慰めともならうと思つたからであります。社會の一隅には、利や慾の爲でなく情の爲に動く分子のある事を彼女の淋しい胸の奥に深く自覺させたかつたからであ



ります。

丁度跛足である事を知つたあの訪問の後五日程して、御主人から一葉の葉書を受取りました。それには、今度娘に良縁あつて他に嫁がせる事となつたから別れの宴を張り度いと云ふ。勿論知人も少い事であるから、私一人を客としてまつてゐると云ふ事が四角四面な文字で記されてありました。この葉書の返事として私は學校の都合で付うしても伺へないから悪からすと云ふ意味の簡単な葉書を出しました。それには深い考も惑もありませんでした。私はその葉書を受取つた時、豫期してゐた事が急に頭の上で大きな爆聲を發した様に思はれて只器械的にその返事を認めたのであります。その返事を受取つた時の彼女の心持等を少しも考へる暇がなかつた程私は取り亂れて苦悶を續けつゝあつたのであります。

然しどうしても、このまゝでは解決が着かないどうかせねばならぬと云ふ氣は絶へず私を、そのかして苦しめました。事實私はどうにかして解決を付けねばならなかつたのであります。然しそれには己の決心が必要である。所が生憎、私には意志の力が乏しい爲充分な決心がなかつたのであります。斷然戀を捨て、進む可きか道徳を捨て、戀に入る可きかに付いて全く暗中に迷つてゐたのであります。一寸こゝで斷つて置かねばならぬ事は今私がこゝで使つた戀と云ふ文字の解釋であります。と云つて満足な解釋は出來ないのであります。要するに、彼女の心を慰めて、將來の安寧の基礎を作る或物を指すのであつて、必ずしも男女間にのみ起る世の所謂戀愛を意味する物でないと云ふ事式附記して置きませう。

斯様に、どうにかせねばならぬと思ひ乍ら、一日一日と延はしてゐる内に、彼女から葉書を受取つたのであります。それは、△月△日の午後八時△分上熊本驛發上京の途に上る故、是非停車場にでもよいから來て

貰ひ度い。そこで詳しく書いて置いた手紙を差上げ度いからと云ふ便りでありました。そして最後に、今度も御出でなき時は、御見捨てなされし事と思ふ。と云ふ意味の切ない胸の斷片が附記してありました。

この△月△日が即、君に付きまとはれて、町をうろつき歩いた、あの日なのであります。

あの日、私には固い決心が出來てゐたのであります。道を呪ひ世を呪つて私は彼女に『あなたを戀してゐる』と云ふ一言を云ふ可く、決心したのであります。

もうその後、わすらはしき出來事は、はぶきませう。そう／＼あの日私は、君の爲に、目的を達する事が出來ず、この悲慘の物語に、最後の幕を下したのであります。即、あの夜を以て、はじめて決解されたのであつたのです。

あの夜。彼女はどんなに私を恨んだでせう。また世を呪つたでせう。私とても、あの夜は、道徳を呪ひ世を呪つて彼女の悲慘に泣きました。

然し遂に無言の内に解決されて私は正しき道を進む事が出來ました。けれ共、彼女の嘆きと思ふ時、彼女の恨みと思ふ時、彼女の呪を思ふ時、今も尙私は道徳を呪ひ度い氣分になるのであります。それ程私は尙道徳的生活の懷疑時代にあるのであります。私は只盲従します。只道徳に盲従するのであります。充分之を納得する前に私は之に盲従させられたのであります。然し決して、之に反感を抱く盲従ではないのであります。私はこの盲従に依つて、いつか眞に道徳の意義と必要とを悟る迄、せめても不正の道に陷る事を防ぎ度いと思ふのであります。私の盲従は道徳修養の手段であります。従つて、一日も早く眞の道徳的生活に入り度いと願ふ熱望がこの盲従の裏面に躍動してゐるのであります。

大分長い事書きました。讀んで行く君にも面倒くさい程私にもすくなからぬ時間と努力とを要しました。思れを書きはじめる頃は盛りであつた庭の白薔薇も、今日此頃の曉の霜に、はかなく枯れて終ひました。涼うら淋しい冬の生活が再び繰り返される時季になりました。庭の落葉のみ徒に堆積して、暖かい日脚は、一日一日と忘れられて行くのであります。

其後彼女も無事に東京に着いて、人妻の生活を送つて居る事と思ひます。詳しく消息は知る由もないので、惜い哉この物語の結末を飾る可き材料もありません。

高臺の上に住む、御老人の家庭にも娘を失つた淋しい冬が日々訪れて参ります。然し御二人共、至つて壯健に暮して居られるのであります。

最後に私は、この手紙を書き出してから七日目の午後一個の小形の小包を受取つたことを附記して大團圓を致しませう。

この小包には差出人の名前は書いてありませんでしたけれ共、東京に在る彼女であると云ふ事は直ぐ知れました。これが彼女から受けた最後の消息であります。

手輕に荷作りした小箱の中は、目覺めるはかりの東人形でありました。而かも、その小さい右の足は、ぽつきり折り取られて、『道の光』と云ふ謎の様な文字を記した桃色の紙片が添へてありました。(終)

白河の流の冷たく響く夜半ペンを擱く たけし